歌舞伎座の思い出

1958 年卒業
岡本　義和

厳密に言うと戦後の歌舞伎座ではないんですが「迷子」になった事があります、多分学校へ行く前でしたから昭和16～7年の事だと思いますが、家が沢瀉会にも入っていた関係で市川猿之助（猿翁）が出勤していたので見に行ったのだと思います。

予約していた幕間に家族で食堂に行きました、ご存知の方も居られると思いますが当時は大食堂が地下にありました、親父はのんびり酒を飲んでおり母親と兄貴は大人しく待っていましたが「僕は先に行く」「お前分かるのかい」「大丈夫」って場内に戻りましたが分かる筈がありません、最前列の入口から出た事は覚えていたのですが暫くウロウロして食堂に戻ると家族が出た後で居ませんでした。

急いで場内に戻ると生憎の暗転で真っ暗ですパニックになりました、前列の出入口から廊下に出ると誰もいません、だんだん悲しくなってウズラの入口が並んだ所で泣いていました。

懐中電灯を持った案内嬢が通りかかり「どうしたの？」「席が分からないの」「全然覚えてないの？」「うん」「何か覚えてない？」「おばちゃんか市つぁんとこ、連れてって」「おばちゃんて誰？」「高杉早苗」案内嬢はすぐ沢瀉会の受付へ連れて行ってくれました。段四郎夫人の高杉早苗さんが席番を教えて「泣かないのよ」とマンナを呉れました、忘れません一番美味しいマンナでした。

本当に些細な出来事ですが、私にとっては今でも鮮明に出てくる思い出です。

子供のくせに「高杉早苗さん」の事を「おばちゃん」でした、まだお若かったと思います。歌舞伎座の廊下で抱っこして貰っている写真もあります。

今でも覚えてますが「沢瀉会」の番頭さんは「市つぁん」で「裏梅会（歌右衛門）」の番頭さんは「音さん」と言いました、可愛がってもらいましたから。

私の歌舞伎は、芝居そのものよりこの様な「廊下トンビ」的な出来事が主流です。
だから円生師の「なめる」が好きなんです。